

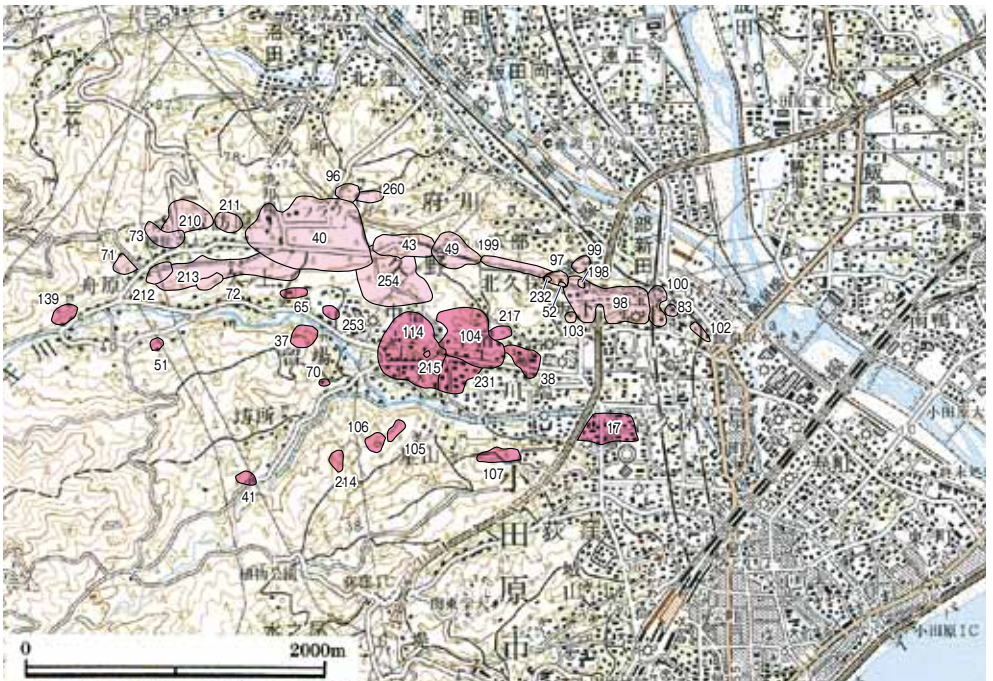
久野遺跡群

— 山王川流域の遺跡 —



例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第8号として、小田原市久野に所在する久野遺跡群を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成24年度国庫補助事業である「市内埋蔵文化財史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)
相原俊夫・河合英夫(株式会社玉川文化財研究所)、小池聡(株式会社盤古堂)、田尾誠敏(東海大学)、株式会社玉川文化財研究所、株式会社盤古堂
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課吉田千沙子が担当者となり、同課山口剛志・渡邊千尋・飯山智久・土屋了介・大島慎一・佐々木健策・岩崎大が補佐し、生涯学習課岡潔・大貫みあき(小田原市郷土文化館)の協力を得ました。また、図版の作成には、山口由美子・北條ゆうこ・鈴木絢子の協力を得ました。



第1図 久野周辺の遺跡位置図(1/50,000、数字は遺跡番号)

赤：山王川流域の遺跡 ピンク：諏訪ノ原丘陵上の遺跡

[表紙] 久野下馬下遺跡第Ⅳ地点遺物集中部遺物出土状況(吉田ほか2003)

[裏表紙] 久野北側下遺跡第Ⅳ地点出土筒型土偶

I 山王川流域の地形と遺跡

1 山王川流域の地形

小田原市内の地形は、山々に囲まれた足柄平野とその中央を流れる酒匂川によって特徴づけられています。平野を取り囲む山は、西部の箱根古期外輪山の南東山稜とその斜面、及びその山麓部に広がる台地、東部の大磯丘陵南西部に分けられます。平野部には、自然堤防や後背湿地、海岸沿いには砂丘が連なっており、変化に富んだ地形を呈しています。

今回取り上げる遺跡の多くは、山王川流域に位置しています。山王川は、小田原市内のほぼ中央を東西方向に流れ、長さは約10kmです（写真1）。箱根古期外輪山の明星ヶ岳（標高923.9m）北斜面に源を發し、酒匂川の南方を流れています。河川の正式名称は、星山橋よりも上流を久野川、下流を山王川と呼んでいます。したがって、山王川流域という場合、本来であれば低地部を流れる下流域を指すことになります。しかし、同一の河川であることから、名称によって両河川を切り離して久野の歴史を考えることは出来ません。そこで、本書では山王川・久野川を山王川水系として一つの流域と捉え、久野川流域の遺跡も取り上げていきます。

山王川は、箱根古期外輪山の斜面を流れ、和留沢から下流の久野一帯にかけてはその浸食作用によって形成された河成段丘や軽石流台地が広がっています。久野周辺の軽石流台地は、主に約5万年前の東京軽石（TP）と呼ばれる軽石を主体とした火砕流が山麓一帯に堆積し、その上をローム層が厚く覆うように堆積して形成されています。



写真1 久野諏訪ノ原丘陵と山王川

軽石流台地には現在までに浸食が進んで多くの谷が刻まれています。平坦面がかなりの部分で残っており、軽石流が流下した方向に緩やかに傾斜しています。山王川の北側に延びる久野諏訪ノ原丘陵や南側の星山丘陵、谷津丘陵は軽石流台地として知られており、特に久野諏訪ノ原丘陵を中心に多くの遺跡が見られます。

現在の山王川は、星山付近から小田原市立病院のすぐ北側を通過、大雄山線の井細田駅の南側まで、東西方向に直線的に流れています。これは昭和初期に施工された河川改修工事以後の流路です。明治16年(1883)に陸軍部測量局が作成した迅速測図を見ると、改修以前の流路は、現在の流路よりも北側でかなり蛇行しながら流れており、流域には広く沖積地を形成していたことが分かります。

本流は、井細田駅付近で流路を南東方向へ変えています。この周辺では、北方の久野諏訪ノ原丘陵の先端から大雄山線の緑町駅付近にかけて、砂州が山王川低地をふさぐ様な形で南北方向に延びています。この砂州から小田原厚木道路にかけての区間は、約6,000年前の縄文海進の時には入江が形成されていたと考えられています。井細田駅南方から南東方向に流れ、国道1号線をくぐり、酒匂川河口の南西約1.3kmの地点、現在の西湘バイパスの小田原IC付近で相模湾に注いでいます。

山王川流域の標高は、舟原付近で240~110m、欠ノ上から下宿で120~20mであり、下流に向かって緩やかに傾斜しています。下流域では、星山から井細田駅付近で20~10m、河口付近では10~5mであり、沖積平野が広がっています。

	一万五千年前	二五〇〇年前	一七五〇年前	一三〇〇年前	八〇〇年前	四〇〇年前	一五〇〇年前	現代
	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安時代	中世(鎌倉~戦国時代)	近世(江戸時代)	近代
本書で紹介する遺跡	久野一本松遺跡	久野北側下遺跡 久野森上遺跡	久野馬道下遺跡 久野下馬道下遺跡 久野中宿遺跡	久野蓮光地遺跡 久野下馬道下遺跡 久野北側下遺跡 久野蓮光地遺跡 久野下馬道下遺跡 千代南原遺跡	久野石田田羅遺跡 久野森上古墳 久野下馬道下遺跡 羽根尾橋穴墓群	久野蓮光地遺跡 久野石田田羅遺跡 下曾我遺跡 小八幡東畑遺跡	久野下馬道下遺跡 久野森上遺跡 久野南舟ヶ原遺跡 酒匂北川端遺跡	石丁場群 小田原城 早川石丁場群 小田原城関連遺跡
市内の遺跡	谷津山神遺跡 愛宕山遺跡	羽根尾貝塚 久野一本松遺跡 前川山王前遺跡	中里遺跡 久野多古塚遺跡 千代南原遺跡	永塚長森遺跡 千代北町遺跡 国府津三ツ俣遺跡	千代寺院跡 聖徳太子が摂政になる 羽根尾橋穴墓群	下堀宮ノ脇遺跡 源頼朝が鎌倉に幕府を開く 足利尊氏が京都に幕府を開く 大航海時代	石垣山一夜城 豊臣秀吉が天下を統一 徳川家康が江戸に幕府を開く	明治維新 フランス革命 関東大震災
主なできごと	水河期が終わる	縄文海進 三内丸山遺跡	吉野ヶ里遺跡	巨大な古墳が造られ始める	平城京に遷都 平安京に遷都	平家が壇ノ浦で滅ぶ		第二次世界大戦

第1表 関連年表

2 山王川流域の遺跡とこれまでの発掘調査

久野地域は、諏訪ノ原丘陵を中心に展開し、市内でも遺跡分布の濃密な地域として、数多くの遺跡の存在が知られている地域です。遺跡が立地するのは台地上ばかりではなく、一部山王川によって形成された低湿地にも及んでいます。山王川流域では、縄文時代～近世にかけての遺跡が確認されています。ここでは、これまでに発掘調査された主な遺跡を時代ごとに紹介します（第1・2図）。

縄文時代(約15,000～2,500年前)では、敷石住居跡しきいしじゆうきょが確認された久野北側下遺跡きたがわした(小田原市No.104遺跡)や、隣接する久野北久保遺跡きたくぼ(小田原市No.217遺跡)、久野森上遺跡もりうえ(小田原市No.114遺跡)などがあります。

弥生時代(約2,500～1,750年前)の調査は、現状では数が少ないですが、久野中宿遺跡なかじゆく(小田原市No.104遺跡)や久野北側下遺跡では、宅地造成に伴い調査が行われました。

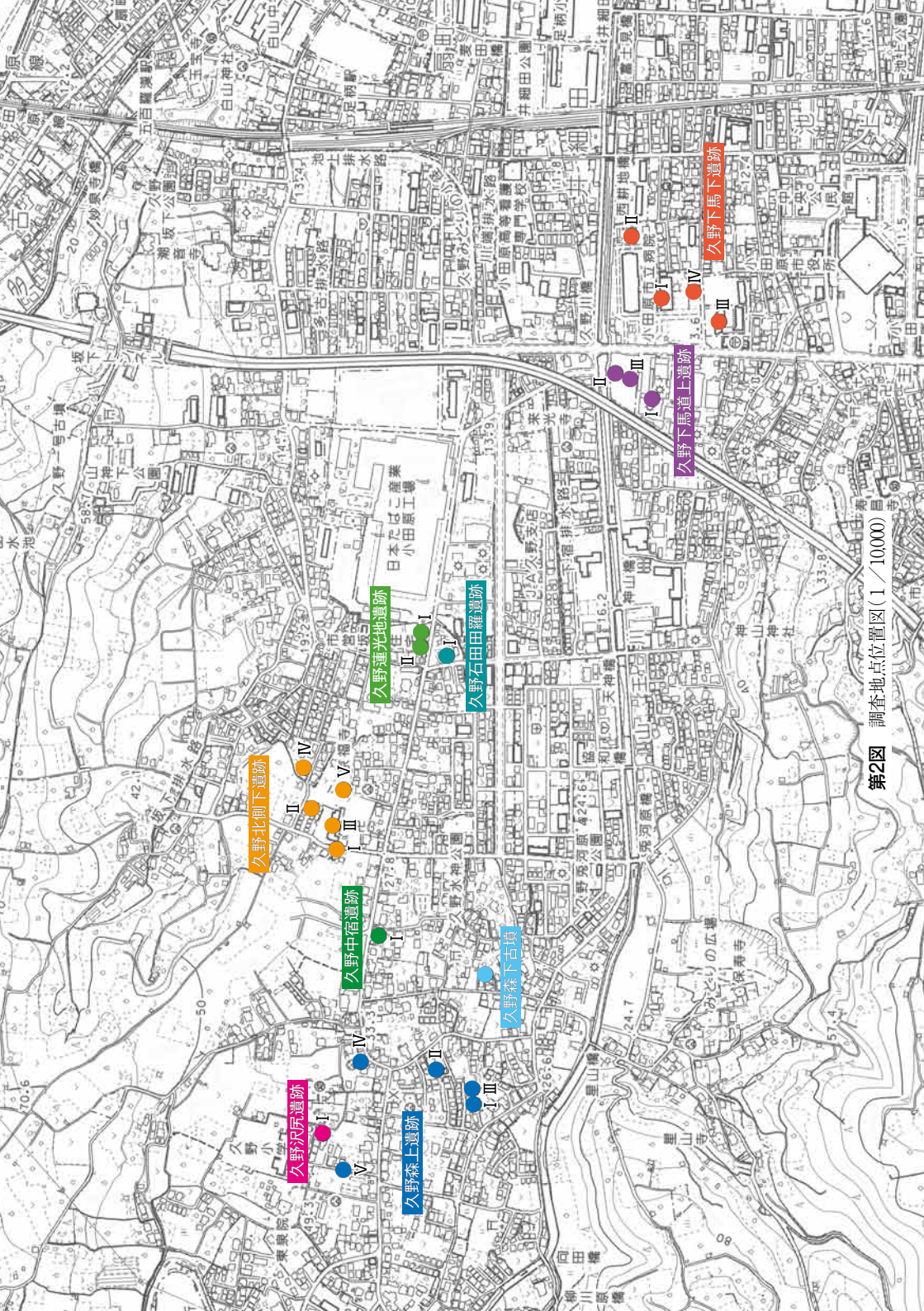
古墳時代(約1,750～1,300年前)になると、久野北側下遺跡や久野蓮光地遺跡れんこうじ(小田原市No.38遺跡)において方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが確認されました。久野森下遺跡もりした(小田原市No.231遺跡)では、久野森下古墳において石室の調査が行われました。山王川をはさんだ南側では、久野下馬下遺跡げばした、久野下馬道上遺跡げばみちうえ(小田原市No.17遺跡)などが有名です。両遺跡とも調査した箇所が多く、土器集中部などの特徴的な遺構が確認されました。

奈良・平安時代(約1,300～800年前)では、久野蓮光地遺跡や久野石田田羅遺跡いしだたら(小田原市No.38遺跡)などがあげられます。

戦国時代(約800～400年前)になると、久野沢尻遺跡さわじり(小田原市No.114遺跡)や久野森上遺跡において、堀などが見つかっています。また、久野南舟ヶ原遺跡みなみふねがはら(小田原市No.51遺跡)においては集石墓が確認され、市の重要文化財に指定されています。下流の久野下馬道上遺跡でも、集石墓を中心とする中世墓群が発見されています。

近世(約400～150年前)になると、久野下馬道上遺跡で石敷遺構、久野北側下遺跡で井戸、溝、土坑といった遺構が見つかっています。その他、遺跡の内容は十分に把握されていませんが、石丁場群いしちょうばが存在します。石丁場とは、石材を切り出した作業場のことです。小田原市内では、早川地区でも石丁場が確認されています。

次に、時代ごとに遺跡の特徴を詳しく説明していきます。山王川流域における昔の人々の足跡をたどってみましょう。



久野北側下遺跡

久野中宿遺跡

久野穴尻遺跡

久野森上遺跡

久野森下古墳

久野通光地遺跡

久野石田羅遺跡

久野下馬道上遺跡

久野下馬下遺跡

第2図 調査地点位置図(1/10000)

II 久野のはじまり

1 旧石器時代

旧石器時代とは、約35,000年前から約15,000年前まで続いた時代です。人々は、狩猟や採集を中心とし、動物や植物を求めながら1箇所に留まることなく移動しながら生活していたと考えられています。

山王川流域においては、旧石器時代に遡る遺跡は残念ながらまだ確認されていません。小田原市内を見ても、旧石器時代の遺跡は極めて少ない状況です。

山王川流域周辺では、北側に広がる久野諏訪ノ原丘陵に位置する久野一本松遺跡、南側では谷津丘陵に位置する谷津山神遺跡、愛宕山遺跡などで石器などの遺物が出土しています。

久野一本松遺跡からは、黒曜石製の石器のブロックとその直下に礫群が1基発見されています。谷津山神遺跡からは、礫器15点と剥片（石器を製作する時に素材の石塊から剥ぎ取られた破片）が多数出土しています。両遺跡とも、旧石器時代の石器がローム層中からまとまって出土した点で貴重な資料であると言えます。

いずれの遺跡も丘陵の平坦面や斜面に位置していることから、人々は動物や植物が豊富な丘陵部を中心に生活していたと考えられます。山王川流域においても、川辺で何らかの活動をしていたことは想像ができませんが、活動の痕跡は発見されていません。今後の発掘調査の進展が期待されます。

2 山王川流域の縄文時代のはじまり

縄文時代は、今から約15,000年前から約2,500年前まで、1万年以上もの間続いた時代です。縄文時代は、草創期（約15,000～9,000年前）、早期（約9,000～6,000年前）、前期（約6,000～5,000年前）、中期（約5,000～4,000年前）、後期（約4,000～3,000年前）、晩期（約3,000～2,500年前）の6時期に区分されます。

この時代も、旧石器時代と同様に人々は狩猟や採集を中心に生活をしていました。旧石器時代との大きな違いは、土器を作ることと竪穴住居を構築し定住していたことです。土器の登場によって、食料の煮炊きが可能となり、栄養状態が格段に向上したと言われています。また、主に台地上に竪穴住居をつくって集落を形成し、定住的な

生活の拠点としました。特に、久野諏訪ノ原丘陵には濃密に遺跡が分布しており、縄文時代中期を中心とする大集落が形成されていたことが知られています。

山王川流域について見てみると、最も古い時期を示す遺物が出土しているのは、久野北側下遺跡第Ⅳ地点です。同地点からは、主に中期末葉から後期前葉の遺構・遺物が発見されていますが、遺構に伴わない状態で縄文時代早期中葉の田戸下層式の深鉢形土器片が出土しています。

また、久野北側上遺跡第Ⅰ地点では、狭い範囲の調査であったこともあり、遺構は発見されていませんが、縄文土器片が多量に出土しています。遺物の大半を占める後期前半の土器とともに、前期後半（諸磯b式）と中期初頭（五領ヶ台式）の土器片が少数出土しています。

このように、山王川流域の縄文時代中期までの遺跡は、土器片が少数出土しているのみであるため、詳しいことは分かっていませんが、この頃には、山王川左岸の低位段丘上に何らかの活動の場として人々が進出していたと考えられます。

中期の遺跡の中心は、久野一本松遺跡において中期から後期初頭にかけての大規模な環状集落が営まれてたことから、久野諏訪ノ原丘陵上であったと推定されます。



写真2 久野北側下遺跡第Ⅱ地点第1号住居跡全景(小池ほか2004)

3 山王川流域の後・晩期の集落

縄文時代後期に入ると、丘陵上の遺跡は減少し、遺跡の分布は丘陵の麓にまで広がっていきます。山王川左岸の低位段丘上でもその傾向は見られ、縄文時代中期末葉以降、後期を中心とする集落遺跡が知られています。ここでは、久野北側下遺跡を中心に、隣接する久野北久保遺跡、久野北久保下遺跡、久野森上遺跡の特徴的な遺構や遺物を見ていきます。

(1) 遺構

久野北側下遺跡第Ⅱ地点では、市内でも類例の少ない柄鏡形敷石住居跡が発見されています。柄鏡形敷石住居跡とは、主に縄文時代中期後葉から後期にかけて見られる堅穴住居の一形態で、主体部と呼ばれる円形の堅穴に、柄鏡の柄のような張出部と呼ばれる出入口をもち、それらの床面に石が敷かれた住居跡のことです。久野北側下遺跡第Ⅱ地点の柄鏡形敷石住居跡については、遺構が良好に確認されているため、以下で詳しく見ていきます。

久野北側下遺跡第Ⅱ地点で確認された、柄鏡形敷石住居跡である第1号住居跡は、後期前半（堀之内式）のものでした（写真2）。この第1号住居跡は、主体部の平面形が円形を呈し、規模は長軸約6.2m、主体部の直径は約4.2m、張出部の長さは約2m、幅は約1.8mです。敷石は主体部、張出部ともに施されていますが、主体部では炉の北側から東側にかけて良好に残されています。主体部と張出部の接合部付近には、大型の石が直線的に敷かれています。また、この部分の敷石には石棒が2点使われている



写真3 久野北側下遺跡第Ⅱ地点
第1号住居跡張出部(小池ほか2004)



写真4 久野北側下遺跡第Ⅱ地点
第1号住居跡炉跡(小池ほか2004)

ました（写真8-1・2）。張出部には板状の石や小型の石を用いて側縁に沿うように配されています（写真3）。^{ろあと} 炉跡は主体部のほぼ中央に構築されています。長楕円形の石を方形に組み合わせて、^{いしがいろ} 石囲炉としています（写真4）。規模は、長さ92cm、幅76cm、床面からの深さは26cmです。柱穴は、主体部の壁際に17基確認されました。出土した遺物は、加曽利B式土器も見られますが（写真5-2）、主体は堀之内式土器の深鉢です（写真5-5）。

久野北側下遺跡第IV地点でも、中期後葉から後期前半にかけての敷石住居跡（第2号住居跡）1軒、竪穴住居跡（第3号住居跡）1軒、炉跡5基、土坑3基、特殊遺構1基、柱穴群1箇所が確認されています。

第2号住居跡は、平面形が直径約4mの円形を呈する敷石住居跡です。遺構の半分以上は調査区外に広がっており、柄鏡形敷石住居跡である可能性が指摘されています。床面には、比較的大型の礫とやや小さい円礫が敷かれています。礫の下には壁際に壁溝と呼ばれる浅い溝が巡っていました。

第3号住居跡は、壁は残っていませんでしたが、柱穴と^{うめがめ} 埋甕が見つかっています。埋甕には中期後葉（加曽利E式）の浅鉢形土器が用いられていました（写真5-3）。土器は底部の一部が壊された状態で、直径約50cm、深さ約30cmの円形の掘り込みに埋設されていました。

柱穴群は13基の大型柱穴が1箇所にまとまって発見されています。柱穴の規模は、径が1~2m、深さも1m程度と非常に大きなものです。炉跡や埋甕などは見つかっていませんが、柱穴の規模や形状から住居跡であったと推定されています。柱穴群から



写真5 久野北側下遺跡第II・IV地点出土土器

は堀之内式の深鉢形土器が出土しています（写真5 - 1）。

第3号土坑内には、後期前半（堀之内1式）の土器が横にして埋設されていました（写真6）。土坑の平面形はやや歪な楕円形で、規模は、長さが1.5m、幅は1.1m、深さは48cmです。

(2) 遺物

久野北側下遺跡第Ⅳ地点では、遺構外から筒型土偶^{つつがたどぐう}が1点出土しています（写真7）。これは、小田原市内では初めての出土で、神奈川県内でも十数例目の大変珍しい資料として注目されており、現在小田原市郷土文化館に展示されています。筒型土偶は、頭部と体部の約1/2を欠損しています。正面に円形の粘土瘤^{ねんどりゅう}を貼りつけて乳房を表現しています。正面と側面には5個以上の穿孔^{せんこう}による穴が縦に配されています。底面には網目の痕跡が残っており、中央には穴が開けられています。

土偶とは、縄文時代の土製の人形のことで、女性を表現したものが多く見られます。土偶は大半が破損した状態で出土することから、豊穡^{ほうじょう}や多産^{たさん}を祈る祭祀^{さいし}の際に意図的に一部を壊していると考えられています。久野北側下遺跡第Ⅳ地点で縄文時代に筒型土偶を用いてどのような祭祀が行われていたのかは分かりませんが、当時の人々の祈りの一端が垣間見える資料です。

次に、土器以外の道具として石器を見ていきます。久野北側下遺跡や久野北久保下遺跡からも多くの種類の石器が出土しています。出土した石器は、石鏃^{せきぞく}、削器^{さつき}、打製石斧^{だせいせきふ}、磨製石斧^{ませいせきふ}、石皿^{いしざら}、磨石^{すりいし}、敲石^{たたきいし}、石錘^{せきすい}、石棒^{せきぼう}などです。

石鏃は、石製の矢じりのことで、狩猟具として使われました。石斧は、石材を打



写真6 久野北側下遺跡第Ⅳ地点第3号土坑
土器出土状況（小池ほか2004）



写真7 久野北側下遺跡第Ⅳ地点出土
筒型土偶

ち欠いて作った打製石斧と研磨して仕上げた磨製石斧があり、打製石斧は、土掘り具として、磨製石斧は、樹木の打割加工など幅広い用途で使われました。石皿（写真8-4）や磨石、敲石は食料を加工する道具として使われた石器です。石皿の上に採集してきた堅果類などの食材をのせ、敲石でたたいてつぶしたり、磨石ですったりしていました。石錘は、漁撈ぎょうろうに使われるやや扁平へんぺいで丸みのある石器です（写真8-5～7）。久野北側下遺跡第Ⅱ地点で出土した石錘は、打製石錘と呼ばれるもので、上下両端に縄くを括り付けるために石を打ち欠いています。石棒は、研磨した丸い棒状の石器で、男性器を模したものと言われています（写真8-1・2）。用途はよく分かっていませんが、儀礼的・信仰的な道具の一種と考えられています。久野北側下遺跡第Ⅱ地点の第1号住居跡のように、敷石などの構築材に転用される例も見られます。

このように、山王川流域左岸の低位段丘上には、久野北側下遺跡を中心として、近接する久野北久保下遺跡、久野北久保遺跡、久野北側上遺跡を含めた範囲で、縄文時代中期末葉から後期前葉を中心に晩期に至るまでの大規模な集落が広がっていました。縄文時代後・晩期に久野に暮らす人々は、山王川流域の段丘上に大規模な集落を営み、丘陵部で狩猟や採集を行い、石錘の出土から、漁撈も行っていたと考えられます。



写真8 久野北側下遺跡第Ⅱ地点出土石器

Ⅲ 弥生時代の遺跡

小田原市内では、弥生時代前期末～後期の遺跡が確認されており、その多くは丘陵部やその縁辺に分布しています。一方、沖積低地においても、酒匂川左岸に位置する中里遺跡なかざと もりとや森戸川右岸の国府津三ツ俣遺跡こうづ みつまたなどで集落と方形周溝墓からなる墓域がセツトで確認されている遺跡もあります。特に弥生時代中期中葉の中里遺跡は、東日本の本格的な弥生集落であり、最大最古級の遺跡として大変注目を集めています。

今回取り上げる山王川流域の弥生時代の遺跡は、久野北側下遺跡と久野中宿遺跡です。いずれも竪穴住居跡は確認されていませんが、弥生時代中期の遺物が出土しており、早い段階から山王川流域の低位段丘上で活動していたことが分かります。

また、久野下馬下遺跡、久野下馬道上遺跡からは、後期の遺物が多量に出土していますが、こちらについてはⅣ－2流域の祭祀場の項で詳しく見ていきます。

久野北側下遺跡第Ⅱ地点では、第3号土坑から前期末から中期初頭とされる粗い条痕文じょうもんが施される甕の胴部破片が出土しています。この時期の土器は、類例が少ないことから、貴重な資料と言えます。久野中宿遺跡では、宅地造成中に後期の甕形土器が発見されました（写真9）。口唇部に刻み、頸部に櫛描波状文くしがき はじょうもんが施されています。

久野諏訪ノ原丘陵に目を移すと、弥生時代中期の集落が久野山神下遺跡第Ⅲ地点で確認されています。また、丘陵東端の多古白山遺跡第Ⅰ地点では環濠やまがみしたと思われる溝が発見されています。

このように、丘陵斜面に方形周溝墓が築かれ、集落が丘陵の先端や南麓に形成されていたことが分かっていますが、山王川流域の弥生時代についてはまだよく分かっていません。今後の発掘調査によって資料が蓄積され、山王川流域の様相がより一層明らかになることが期待されます。



写真9 久野中宿遺跡出土土器
(小田原市郷土文化館保管)

IV 古墳時代の遺跡

1 古墳時代前期の集落と墓域

古墳時代前期には、山王川左岸に広がる低位段丘上に集落と墓域が近接して広がっていることが発掘調査によって徐々に分かってきました。この時期の遺跡として知られる、久野北側下遺跡、久野北久保遺跡、久野蓮光地遺跡を見ていきます。

久野北側下遺跡からは、第Ⅲ地点で方形周溝墓が1基発見されています（写真10、写真右が北）。方形周溝墓とは、弥生時代から古墳時代前期に見られる墓の一種で、遺体を埋葬する土坑の周囲に溝をめぐらせたものです。第Ⅲ地点で確認された方形周溝墓は、すでに墳丘は失われていましたが、北側の溝を除く一辺約20mの周溝が確認されました。南西隅には、土橋状に溝を掘り残す部分が確認されています。また、久野北側下遺跡の竪穴住居跡は、第Ⅳ地点で1軒、第Ⅴ地点で4軒が発見されています。隣接する久野北久保遺跡第Ⅰ地点からも竪穴住居跡が10軒程確認されています。

両遺跡から東方に約200mに位置する久野蓮光地遺跡では、第Ⅱ地点から、古墳時代前期の方形周溝墓が1基、溝が1条、竪穴状遺構が2基発見されています。



写真10 久野北側下遺跡第Ⅲ地点1号方形周溝墓(小林1996)

1号方形周溝墓は南東コーナー部が発見されました(写真11、写真左が北)。発見された範囲での規模は東西約4.3mで、北に向かって直角に屈曲しています。

1号溝は東西方向に確認され、両端は調査区外へと続いていきます。幅が約1.2mで、断面形が逆台形であること、1号方形周溝墓と同じ方向性をもつことから方形周溝墓の周溝の一部である可能性が指摘されています。

2基発見されている竪穴状遺構の内、1号竪穴状遺構からは土器がまとまって出土しています(写真12)。竪穴状遺構とは、柱穴や炉跡などの住居に伴う施設をもたず、詳しい性格が分からない遺構です。1号竪穴状遺構の平面形は、不整形な隅丸方形を呈し、規模は一辺2.7mの掘り込みです。出土した土器の器種としては、広口壺や壺、台付甕、高坏が見られます。広口壺は胴部が丸い器形で、口縁部が折り返しになっています。壺は、肩部に斜縄文を2段施文し、円形浮文(粘土をボタン状に成形して貼り付けた文様)が貼り付けられています。高坏は、ほぼ完形品で口縁部が外に反る器形です。外面には丁寧な磨きが施されています。

このように古墳時代前期の竪穴住居跡と方形周溝墓がセットで発見されており、山王川左岸の低位段丘上には方形周溝墓を伴う比較的範囲の狭い集落が点在していた可能性もあります。一方、沖積地の調査事例として久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点が挙げられます。同遺跡からは、古墳時代前期の竪穴住居跡が多数発見されており、川辺の微高地上に集落が形成されていたことが分かりました。このことから、山王川流域の沖積地は、水田などの生産域が広がっている近くに集落が進出していたことが考えられます。



写真11 久野蓮光地遺跡第Ⅱ地点1号方形周溝墓
(諏訪間ほか2007)



写真12 久野蓮光地遺跡第Ⅱ地点
1号竪穴状遺構土器出土状況
(諏訪間ほか2007)

第3図 散策マップ

(S=1/8,000)



凡例

- | | | | |
|-----|--|---------|--|
| 小学校 | | 説明板 | |
| 保育園 | | 小田急線 | |
| 市役所 | | 大雄山線 | |
| 公園 | | 信号 | |
| 古墳 | | 公民館 | |
| 神社 | | 派出所・駐在所 | |
| お寺 | | | |

2 川辺の祭祀場

久野下馬下遺跡

久野下馬下遺跡は山王川右岸、現在の小田原市立病院周辺に位置しており、東西約530m、南北約360mの範囲になります。これまで7地点の発掘調査が行われており、南北に走る神奈川県道74号小田原山北線を挟んで東側が久野下馬下遺跡、西側は久野下馬道上遺跡と呼称されています。久野下馬下遺跡は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺物散布地として周知されており、遺物の出土状況から川辺における祭祀場として注



写真13 久野下馬下遺跡第Ⅱ地点土器出土状況
(杉山ほか1989)



写真14 久野下馬下遺跡第Ⅱ地点出土土器



写真15 久野下馬下遺跡第Ⅲ地点木製品等出土状況(小林ほか1998)

目されています。それでは各地点の調査成果を少し詳しく見ていきましょう。

久野下馬下遺跡第Ⅰ地点は、小田原市立病院の建設工事中に大量の遺物が発見されたため、調査が行われました。調査区のB地点から、古墳時代前期後半の土器が大量に出土し、また、その近くから石鍬の破片や磨製石斧、石皿といった時期不詳の石器も少量出土しています。

第Ⅱ地点は、小田原市立病院の建替に伴って調査が行われました。石組遺構や木杭列などの遺構が見つかり、周辺には建築部材と考えられる木材が散乱していました。遺物の大半は古墳時代中期の土師器が占めており、器種としては坏と甕が多く、他に埴や須恵器の坏蓋・身も見られます（写真14）。中には、完形遺物が調査区中央付近でまとまって出土している箇所もありました（写真13）。調査区南西付近では石製品が出土しました。内訳は、紡錘車^{ぼうすいしゃ}1点、石製模造品（剣形1点、有孔楕円板2点）、石製小玉28点です。石製模造品とは、^{まがたま}勾玉や鏡、剣などを模したといわれる小型の石製品で、祭祀遺構に伴って出土する事例が多い遺物です。

第Ⅲ地点は、小田原市立病院の寮建設に伴って調査が行われ、古墳時代中期の遺物が集中的に出土し、建築部材や農具、木槌^{きづち}や篋^{へら}等の工具、曲物^{まげもの}や刳物^{くりもの}の容器など様々な木製品を多量に含んでいました（写真15）。

第Ⅳ地点は、小田原市立病院の耐震性貯水槽建設に伴う調査として行われました。



写真16 久野下馬下遺跡第Ⅳ地点遺物集中部全景(吉田ほか2003)

遺構としては、北東－南西方向に延びる溝状遺構が2条確認されています。この溝より西側、東西9.5m、南北4.5mの範囲で古墳時代中期の遺物が集中的に発見されており、調査区外にも広がっている可能性が指摘されています（写真16）。この集中部は、調査区北西角に面した箇所ので遺物密度が最も高く、完形もしくはそれに近い土器が集中していました（写真17）。

土器は土師器が大半を占め、器種としては埴わんが多く見られます（写真19－4・5）。他に、甕（写真18－1）、高坏（写真18－2）、壺（写真18－3）、甗はそう（写真19－3）があります。また、初期須恵器も坏蓋・身（写真19－1・2）、高坏、甗が少量出土しています。甗とは、小型の壺の胴部に小さな穴が開けられているものです。穴の部分に竹管を挿入して、中に入れた液体を



写真17 久野下馬下遺跡第IV地点遺物集中部
（吉田ほか2003）



写真18 久野下馬下遺跡第IV地点出土土器



写真19 久野下馬下遺跡第IV地点出土土器・石製品

注いでいたと考えられます。

土器以外に、滑石製品かつせきが大量に出土しています。石製模造品は、鏡形4点、勾玉形2点、鏡もしくは勾玉形の小破片1点、臼玉うすだまは847点も出土しています（写真19-6～9）。遺物の出土状況や内容から、祭祀遺構として非常に注目される事例です。

小田原市立病院から県道をはさんで西側の久野下馬道上遺跡第Ⅰ地点では、工場の建設に伴って調査が行われました。時代は少し溯りますが、弥生時代後期の土器が集中した状態で2箇所見つかっています。1号土器集中区では、炭化物の分布範囲上に壺・甕類がまとまって出土しました（写真20）。2号土器集中区も1号と同様に壺・甕類が主体です。2号土器集中区には駿河地域に系譜をたどることができる複合口縁壺の破片や中部高地系の櫛描波状文が施されている甕の破片が含まれていました。また、すぐ北側からは炭化米がまとまって出土しました（写真21）。

第Ⅲ地点では、古墳時代前・中期の遺物が集中して確認され、また、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居跡が多数発見されました。これまでの6地点とは様相が異なり、集落が営まれていたことが発掘調査によって新たに分かりました。

これらの調査成果を整理すると、久野下馬下遺跡では弥生時代後期以降、古墳時代中期を中心とする時期に、何らかの祭祀行為が行われていたと考えられますが、当時の人々が何を祈ったのかは現在のところはっきりしていません。このような祭祀行為を行っていた人々の集落はどこにあったのかがこれまで課題とされてきましたが、久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点の調査成果から、祭祀場付近の沖積微高地上に集落が営まれていたことが分かりました。集落域と祭祀域が確認できる事例として非常に注目される遺跡です。



写真20 久野下馬道上遺跡第Ⅰ地点1区
1号土器集中区(小山ほか2002)



写真21 久野下馬道上遺跡第Ⅰ地点1区
2号土器集中区炭化米検出状況
(小山ほか2002)

3 山王川流域の後期古墳

久野地域の古墳時代後期の古墳といえば、久野諏訪ノ原丘陵上にある古墳群が有名です。特に「久野^{ひやくつか}百塚」、「久野^{つくとつか}九十九塚」と称されるほど丘陵南側を中心に数多くの古墳が分布していました。その中には、神奈川県内で最大級の円墳である久野1号墳や豊富な副葬品が納められていた久野2号墳、横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}をもち墳丘^{ふんきゆう}には葺石^{ふきいし}が施されていた久野4号墳、県内でも珍しい銅鏡^{どうわん}が出土した総世寺裏^{そうせいじうら}古墳など、著名な古墳も多くあります。これらについては、小田原の遺跡探訪シリーズ2『久野諏訪ノ原丘陵の遺跡－久野古墳群と周辺遺跡－』で詳しく紹介されています。

今回は、久野諏訪ノ原丘陵と山王川の間に位置する古墳を紹介していきます。この地域は、宅地化が進んでいるなど、現状で墳丘を確認することができる古墳はほとんどありませんが、発掘調査成果によって古墳が確認された遺跡は、久野北側下遺跡第V地点、久野北久保遺跡第I地点、久野森下古墳です。いずれの古墳も久野諏訪ノ原丘陵と山王川との間に広がる緩傾斜地に位置し、標高は25～35mほどを測ります。

久野北側下遺跡第V地点では、古墳の石室が1基確認されています。また、北側に隣接する久野北久保遺跡第I地点では、古墳の周溝が1条確認されています。両地点とも久野大畑地区土地区画整理事業に伴う試掘調査であるため、詳しい調査は行われていませんが、後期古墳が分布していることが分かりました。

両地点から南西に約500mの場所に位置する久野森下古墳の周辺は、宅地化が進んでいますが、かつては4基以上の古墳が存在したと伝えられています。同古墳から北東に約50mの場所に祀られている神明神社は、径20m、高さ3m程の盛土上に建てられていますが、この盛土も古墳の可能性があることが指摘されています。

久野森下古墳は、宅地造成中に埋葬施設である石室の床面と側壁の基底部の一部が発見されたため、昭和50年(1975)に調査が実施されました。調査の結果、石室の構造と出土した須恵器から、7世紀後半に築造されたと考えられ、本来は直径15mほどの円墳であったと推測されています。

石室は、南に開口する無袖式^{むそでしき}の横穴式石室と呼ばれるものです(第4図)。横穴式石室とは、墳丘の側面に入口を設けた石室のことで、何度も埋葬できるという追葬可能な点が大きな特徴です。石室は遺骸を安置する^{げんしつ}玄室と、それに通じる^{せんどう}羨道と呼ばれる通路で構成されます。久野森下古墳の石室は、玄室と羨道の幅がほぼ同じであるため無袖式^{むそでしき}に分類されます。羨門(石室の入口)から奥壁に向かい8.3mの範囲で床面

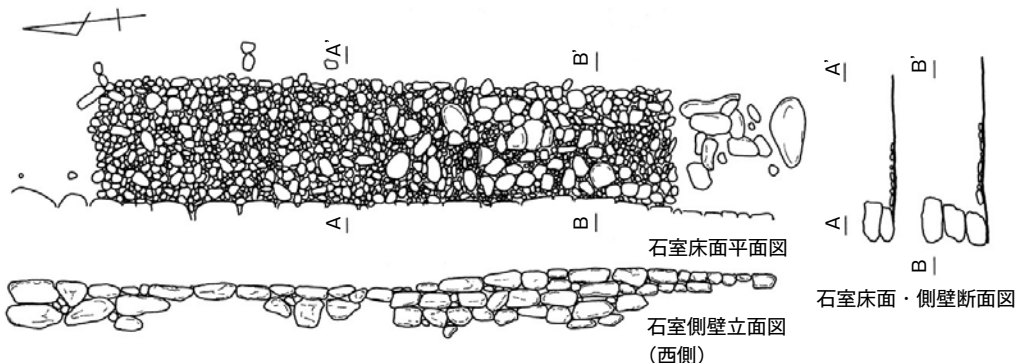
が確認されていますが、奥壁は失われているため築造当初の全長は不明です。玄室床面には拳大の河原石が敷き詰められており、羨道にはやや大きめの石が用いられています。羨門付近に見られる8個の大型の河原石は、羨門の閉塞に用いられていたと考えられます。側壁は、東側が全く残っておらず、西側壁の残りの良い部分で高さ60cm、4段の石積みが残っていました。

石室はかなり壊されていましたが、内部からはまとまった量の遺物が出土しました。遺物は小田原市郷土文化館に収められており、一部の須恵器は展示されています。

須恵器は、広口壺1点、フラスコ形長頸瓶2点、平瓶1点(写真22)が羨道部から出土し、他に工事関係者によって石室中から平瓶1点が採集されています。鉄製品も多く出土しており、その内訳は直刀4点、刀子2点、鉄鏃30点以上、弓の付属品である両頭金具6点、不明鉄製品1点です。他に直刀2点が工事中に出土しています。他の副葬品として、金銅製の金環7点、鉄環1点、ガラス製小玉11点が出土しています。鉄鏃は、羨道部と玄室で10点前後がひとまとまりになって4箇所に分布していました。このことから、追葬が行われたことが推測されています。



写真 22 久野森下古墳出土須恵器 平瓶



第4図 久野森下古墳石室実測図(1/80) (金子ほか1979をもとに作成)

V 奈良・平安時代の遺跡

奈良・平安時代の遺物が出土した遺跡は多くありますが、遺構が発見された遺跡となると数は限られてきます。本項では、堅穴住居跡が発見されている久野蓮光地遺跡と久野石田田羅遺跡を見ていきます。

久野蓮光地遺跡第Ⅰ地点では、平安時代(9世紀代)の硬化面1箇所と土坑1基、奈良時代(8世紀中頃)の堅穴住居跡1軒が発見されました。第Ⅱ地点からは、土坑2基とピット28基が発見されています。住居跡は発見されませんでした。ピット群の中にはL字状や直線的に並ぶ箇所も見られることから、掘立柱建物跡や柵列などが存在した可能性が指摘できます。

久野石田田羅遺跡第Ⅰ地点では、古墳時代後期～奈良・平安時代とされる堅穴住居跡が2軒発見されています(写真23)。2軒とも遺構の半分以上が調査区の範囲外に広がるため全容は不明ですが、平面形は方形を呈すると推定できます。規模は、1号堅穴住居跡(写真手前)が一辺約3.7m、2号堅穴住居跡(写真左)は一辺約3.4mです。床面は貼床によってしっかりと造られており、貼床上面はほぼ全体が土間状に硬化していました。また、1号堅穴住居跡の東壁にはカマドが構築されていました。

山王川流域の周辺では、奈良・平安時代の集落遺跡としては、久野諏訪ノ原丘陵東端に位置する小田原市No.98遺跡(久野多古境遺跡・久野山ノ神遺跡)で多数の堅穴住居跡が発見され、大集落の存在が知られています。これらの遺跡は、丘陵東端の緩斜面から裾部に立地しています。久野蓮光地遺跡や久野石田田羅遺跡も、低位段丘の南側緩斜面裾部という、類似した立地であることから、周辺一帯で集落が広がっている可能性が高いと考えられます。



写真23 久野石田田羅遺跡第Ⅰ地点調査区全景

VI 中世

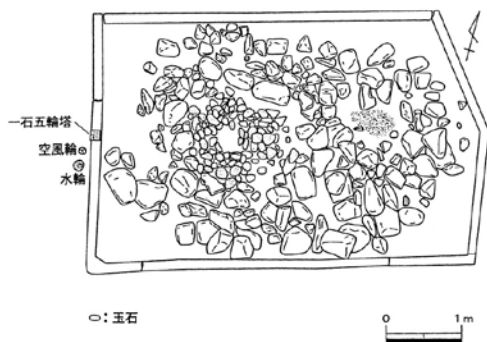
1 山王川流域における中世前期の遺跡

山王川流域の中世前期の遺跡としては、久野南舟ヶ原遺跡や久野下馬道上遺跡などがあります。

久野南舟ヶ原遺跡や久野下馬道上遺跡では、中世の集石墓^{しゅうせきぼ}が確認されています。集石墓とは、石を敷き詰めたり、積み上げたりして造った墓で、中央に火葬骨が納められているものです。骨は、直接もしくは壺や甕などの蔵骨器に入れた状態で納められています。市内では、小田原城下御組長屋遺跡^{おくみながや}において、中世後期（16世紀前半）の集石墓が見つかっています。

久野南舟ヶ原遺跡第I地点では、集石墓が1基確認されています（第5図、写真24）。市指定史跡として知られており、『小田原の文化財』にも紹介されています。この集石墓は、土地所有者のご厚意により、見学が可能な状態で保存されています。

同遺跡は、昭和26年（1951）に最初の発掘調査が行われました。当初は縄文時代晩期の敷石住居跡と考えられました。敷石のやや西寄りに土坑が確認さ



第5図 集石墓平面図(1/100)



写真24 久野南舟ヶ原遺跡第I地点集石墓全景



第6図 集石墓出土甕実測図(1/15)

れ、中には甕が伏せてあり、火葬骨が充填じゅうてんされていたと報告されています。

平成12年(2000)には、遺構の現状把握と性格の再検討を目的として再調査が行われました。調査の結果、集石は、縄文時代晩期の敷石住居ではなく、中世の集石墓であることが分かりました。集石墓は、大小275個の石で形成されています。中央やや西寄りに位置する玉石で組まれた部分の内部からは、甕の破片が出土し、底面からは甕の口縁部が伏せた状態で出土しました。また、覆土からは骨片が多く確認されました。

出土した甕は、常滑産のもので、高さが約64cm、最大径が約70.2cmの大型品で、13世紀前葉に位置付けられます(第6図)。現在は郷土文化館じょうとくぶんかんに展示されています。この他、常滑産の捏鉢ねぼちや外国産の陶磁器で黄色の釉薬ゆうやくが施された瓶破片も出土しています。

集石墓の周辺には、塚状の高まりが2箇所確認されています。中世墓は、集団墓しゅうたいぼを形成する例が多いことから、それらも墳墓である可能性が指摘されています。

久野諏訪ノ原丘陵では、丘陵南麓に位置する久野多古境遺跡第Ⅰ地点において中世の墓が確認されており、火葬骨が納められた三筋壺さんきんこが完全な形で確認されています。小田原の遺跡探訪シリーズ2『久野諏訪ノ原丘陵の遺跡－久野古墳群と周辺遺跡－』で詳しく紹介されています。

次に、最近の注目される調査事例である久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点で複数確認され



写真25 久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点集石墓群全景(玉川文化財研究所撮影)

た集石墓について見ていきます（写真25）。1号集石墓は、人頭大の河原石を使って構築されており、中央部には埋葬施設と思われる長方形の石組部が見られます（写真25右奥、写真26）。2号集石墓は、人頭大の河原石を使って方形に区画した縁石が築かれています（写真25中央）。内部には、やや小ぶりで扁平な河原石を用いて小区画が3箇所形成されており、中央の区画からは写経石しやきょうせきが多数出土しました。写経石とは、石に経文を一文字ずつもしくは複数文字を書き写したものです。複数文字が書き写されたものを多字一石経たじいっせききょうと呼び、一文字のものより時期が古いとされています。2号集石墓で確認されたのは、多字一石経でした。1・2号集石墓以外は、小型の集石墓で、人頭大かそれよりもやや小さな河原石を用いて方形に敷き詰めています。

この他にも、土坑墓どこうぼが2基確認されています。土坑墓とは、地面に穴を掘り、死者を埋葬した墓のことです。また、遺物で注目されるのは、12世紀中頃の白銅鏡が25号土坑から1点出土しています（写真27）。白銅鏡には、布状のものに包まれていた痕跡が残っていました。このように市内でも例を見ない中世墓群の発見によって、山王川流域の中世を考える上で大変貴重な資料が追加されたと言えるでしょう。

さて、ここで久野南舟ヶ原遺跡と久野下馬下遺跡の立地を見ると、久野南舟ヶ原遺跡は標高約130mの河成段丘上、久野下馬道上遺跡は標高約14mの低地部に位置するという点で、地形的な環境は異なっています。しかし、両遺跡とも山王川の右岸に位置しているという点では共通しています。

流域における中世前期の調査事例が少ないため、この時期の集落や墓域がどのように広がっていたのかは、正確には分かっていません。山王川流域における中世前期の土地利用のあり方については、今後の検討課題と言えます。



写真26 久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点1号集石墓
全景(玉川文化財研究所撮影)



写真27 久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点白銅鏡出土
状況(玉川文化財研究所撮影)

2 山王川流域における中世後期の遺跡

江戸時代後期に記された『新編相模国風土記稿（以下、『風土記稿』）の「久野村」部分では、「北条幻庵屋敷跡 幻庵墓附 小名中宿にあり」と書かれています。北条幻庵（長綱）とは、伊勢宗瑞（北条早雲）の子で、北条五代に仕え、政治・軍事面、また、文化人としても活躍した人物です（第7図）。『風土記稿』によると、屋敷跡推定地の南側に「中屋敷」「太鼓屋敷」、東側に「七軒屋敷」という字名があり、幻庵屋敷の名残りとして残っています。また、江戸時代前期に記された『久野村鑑』でも、幻庵屋敷の範囲について触れられています。これらのことから、久野中宿周辺には、幻庵屋敷が存在したことがわかります。この幻庵屋敷ですが、天正18年(1590)の小田原合戦時に、豊臣側が北条氏の軍事力を調査した『北条家人数覚書』には、「久野の城」と書かれており、久野にある屋敷を城として認識していたことがわかります。

周辺の調査では、久野森上遺跡第Ⅳ地点と久野沢尻遺跡第Ⅰ地点で中世の堀が確認されました。

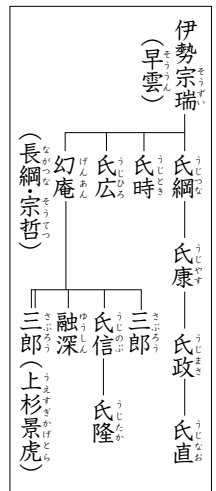
久野森上遺跡第Ⅳ地点は、中宿公民館新築時に調査が行われ、堀と土塁が確認されました。堀の北側が調査区外のため、堀全体の形状は不明ですが、深さが約2.6mと、大規模な堀であったことが想定できます。

久野沢尻遺跡第Ⅰ地点で確認された堀は、上端幅約7.2m、底面幅約3.3m、深さ約3.5mで、調査区中央を南北に横断する形で検出されました（写真28）。堀法面の傾斜角は、西側上部が約70度、下部が約80度、東側上部が約72度、下部が約85度と上部より下部の傾斜が急であることがわかりました。また、堀の底部両脇に1条ずつの溝が並行していました。

いずれの堀も16世紀後葉の遺物を含むことから、北条幻庵屋敷に関係している可能性が考えられます。今後の調査で屋敷跡との関連性などが明らかになることが期待されます。



写真 28 久野沢尻遺跡第Ⅰ地点1号堀全景
(小田原市教育委員会 2010 より)



第7図 北条氏略系図
(黒田2012をもとに作成)

Ⅶ 近世

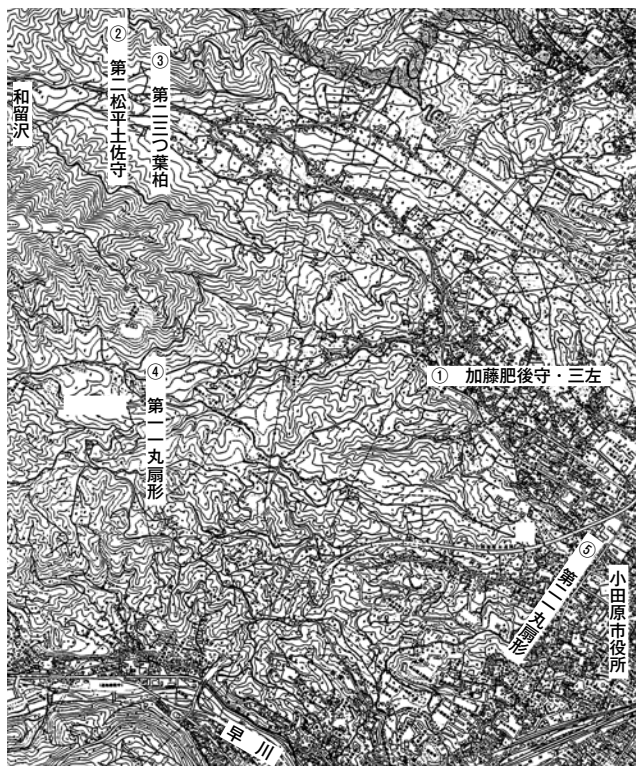
山王川流域の石丁場

石丁場とは、石材を切り出した作業場のことです。小田原市内では、有名な石丁場としては、早川石丁場群（小田原市No264 遺跡）があげられます。早川石丁場群については、小田原の遺跡探訪シリーズ7『史跡石垣山（石垣山一夜城）早川石丁場群かんぱくざわしじゅん』に詳しく紹介されています。早川石丁場群では、江戸城で使用するための石垣用石材が採掘され、江戸へと運ばれたと考えられます。このような石垣用石材が切り出された石丁場が久野にも存在していたことが明らかにされています。

石丁場には、こくいん めいぶん刻印・銘文が刻まれた石材が確認されています。山王川の流域においても、刻印・銘文が刻まれた石材が点在していることが、分布調査によって明らかになっています。

まず、山王（久野）川と坊所川に分岐する向田橋付近で「加藤肥後守 石場」の銘文と、「三左」の銘文と「槌」の刻印のある転石が確認されました（第8図①、第10図）。「加藤肥後守 石場」は転石の北面に、「三左」の銘文と「槌」の刻印は転石の南面にありました。この転石は、残念ながら宅地造成により壊されてしまい、現在は見るできません。

その後の調査で、和留沢林道南側で「松平土佐守」という名とともに、石丁場



第8図 山王川流域における石丁場分布図
(内田 2001 より引用一部改変)

の範囲を示した銘文が刻まれた石と、「三つ葉柏^{かしわ}」の刻印石が見つかっています（第8図②③、第9図）。「三つ葉柏」は四国高知城主山内家^{やまのうち}の家紋にあたります。

坊所林道付近においては、「一丸扇形」の刻印が施された石も、確認されています（第8図④、第11図）。これらの確認された石材は、いずれも山王（久野）川や、坊所川の近くに点在していることから、石を切り出した後、川沿いに石材を運んでいたのかもしれない。

では、切り出された石材は、どこの城に使われたのでしょうか。先に紹介した「槌」の刻印石は、小田原城石垣にも確認されており、久野で切り出された石材が小田原城で使われていた可能性が考えられます。また、寛永5年（1628）の大地震により江戸城石垣が崩落し、その改修工事のために山内家（松平土佐守）が採石場を久野周辺で確保する様子が『忠義公記』第2巻に記載されています。このことから、久野で切り出された石材の一部は、早川石丁場群のように、江戸城の石垣として使用されていた可能性も考えられます。

以上の石丁場では、箱根火山の噴火によって形成された安山岩が切り出されていますが、山王川上流の和留沢地区にある石丁場では（第8図）、凝灰岩の石材が切り出されています。

このように、久野においては安山岩や凝灰岩などの石材を切り出した石丁場が確認されていますが、今後、石丁場の詳細な分布状況などを明らかにすることが求められています。



第9図 三つ葉柏 刻印（内田2001）



第10図 「三左」の銘文と「槌」の刻印
（内田2001）



第11図 一丸扇形 刻印

（拓本は第8図⑤のもの）（内田2001）

文 献

本書を作成にするにあたり引用または参考にした主な文献を掲載しました。山王川流域の久野遺跡群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 内田 清 2001「足柄・小田原産の江戸城石垣石－加藤肥後守石場から献上石図屏風まで－」『小田原市郷土文化館研究報告No.37（人文科学No.19）』小田原市郷土文化館
- 大島慎一 2003「小田原城周辺の石切り丁場遺跡」『石垣普請の風景を読む』東北芸術工科大学
- 小田原市教育委員会 2004『平成12年度試掘調査』小田原市文化財調査報告書第107集
- 小田原市教育委員会 2007『久野諏訪ノ原丘陵の遺跡－久野遺跡群と周辺遺跡－』小田原の遺跡探訪シリーズ2
- 小田原市教育委員会 2010『平成22年 小田原市遺跡調査発表会』発表要旨
- 金子皓彦 1979『小田原市文化財調査報告書』小田原市文化財調査報告書第9集
- 黒田基樹 2012『戦国北条氏五代』中世武士選書第8巻、戎光祥出版株式会社
- 小池聡ほか 2004『久野北側下遺跡第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ地点 久野北久保下遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第123集
- 小林義典 1996『久野北側下遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 小林義典ほか 1998『下馬下遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第65集
- 小林義典 1998『森上遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点』小田原市No.114 遺跡発掘調査団
- 小林義典 2003『久野北側下遺跡第Ⅰ地点 久野北側上遺跡第Ⅰ地点 久野北久保遺跡第Ⅱ・Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第114集
- 小山裕之ほか 2002『久野下馬道上遺跡発掘調査報告書』久野下馬道上遺跡発掘調査団
- 佐々木健策 2008「小田原市内の石丁場について」『発掘調査成果発表会・公開セミナー』財団法人かながわ考古学財団
- 杉山幾一ほか 1989『下馬下遺跡』小田原市文化財調査報告書第25集
- 諏訪問順ほか 2005『久野蓮光地遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第131集
- 諏訪問順ほか 2007『久野蓮光地遺跡第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第140集
- 立木望隆・寺田兼方 1965「小田原市立病院院内出土の遺物」『上代文化』第33輯、國学院大学考古学會
- 南館則夫ほか 1986「北条幻庵居館址の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第21集
- 吉田浩明ほか 2003『下馬下遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第111集
- 渡辺外 2009『久野下馬道上遺跡（第Ⅱ地点）』かながわ考古学財団調査報告 248

小田原の遺跡探訪シリーズ8

久野遺跡群

—山王川流域の遺跡—

平成25年3月15日 印刷

平成25年3月22日 発行

編 集 小田原市教育委員会

発 行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電 話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印 刷 (有)石橋印刷

